

あんげろす

キリスト教主義大学の使命

橋本 茂

かつては教会で育ったクリスチャンが大学に入学し、大学のキリスト教的建学精神の高揚に貢献した。しかし、現在は、教会は高齢化し、大学に若きクリスチャンを送り出す力が非常に弱くなっている。このような状況の中で、キリスト教主義大学の使命は、キリスト教的文化で満ち溢れたキャンパスを作ること、そして、その文化を享受することによって、キリスト教的な知識と教養をいっぱい身に着けた、キリスト教受容のレディネスを備えた、多くのノン・クリスチャンの学生を世に送り出すこと、そして、彼らがいつか教会へと足を運び、クリスチャンになるようにと祈ること、これが、実行可能なキリスト教主義大学の使命ではないでしょうか。

第 63 号

2014 年 3 月

明治学院150年目のキリスト教

司馬純詩

150年は、人生をしのぐ時の流れ。世代なら、6・7代も前の祖先の時代です。人間誰しも、その時代を生きた64人から128人の男女の祖先の血を受け継いでいます。どのような人たちであったか、興味をそそるところです。そして、私達の所属する明治学院大学も、多くの先達の文化遺産を引き継いでいます。初代総理ヘボンや2代目井深梶之助、それに続く多くのキリスト者の営々たる営みが、この間引き継がれてきました。はたして何人の(有名無名の)信徒たちが、明治学院大学の文化を引き継いできたことでしょうか。

その150年目にあって、大学では建学の精神キリスト教をめぐって少し地殻変動があったような気がします。

13年度はキリスト教研究所の(150周年)記念出版「境界を超えるキリスト教」の完成年次でした。かつて学院長、学長、学部長や宗教部長を務められた先生方や、現役の先生方など、大学を代表するキリスト者20人のご寄稿をいただき、340頁の大著を教文館から出版出来ました。おかげさまで、研究所の記念碑的著作となりました。

大学宗教部委員会は年2回の予定でしたが、春学期には3回開催されました。建学の精神キリスト教を巡る危機感を感じた委員たちの要望でした。私が提出した宗教部の現状報告を巡って、活発な議論がありました。具体的成果は、今後を待ちますが、危機感の

共有は手堅く感じられました。

8月には学院長室主催のキリスト教学校セミナー「これまでの明治学院／これからの明治学院」に参加しました。ノンクリスチャンの先生・職員の発題で開始され、「キリスト教を知らずとも、を是として良いのですか」という積極的挑発がありました。一方、現状の「押し付けずが良い」というご意見もありました。年1回のセミナーですが、拡大的発展を望んでやみません。

春学期からの法人理事・監事のチャペルアワー奨励は、秋に至って回数も増え、内容も充実しました。お願いする先生方はほぼ一巡しましたが、結果として、学生の参加数に大いなる危惧を巻き起こしました。ご担当の各先生方にお渡しした「大学チャペルアワーの考え方と基礎資料」は、記録の残る60年代からの歴史を説明しています。現状は「全てのキリスト者の責任でもある」との実態が知られるようになった。

キリスト教研究所(150周年記念出版プロジェクト)では、出版記念祝賀会と共に記念シンポジウム「明治学院大学とキリスト教教育」が開催されました。発題1「キリスト教大学の理念とキリスト教」加山久夫名誉所員・名誉教授、発題2「明治学院大学のキリスト教教育」永野茂洋所員・教授、コメント；橋本茂名誉所員・名誉教授・理事。青本健作理事長は大変に勇気づけられるコメントを下さいました。

年明けの1月10日に、理事会後にキリスト教教育を巡って「明治学院におけるキリスト教教育の現状について、一理事・監事におけるチャペルでの奨励実施結果―」が持たれま

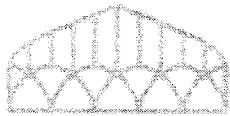
した。80年代以来の大学の拡大・普遍化は、専門教育の充実の反面、建学の精神キリスト教教育科目が減少する結果ともなっています。また、学院全体では、キリスト教教育を総合的に統治統括する制度が乏しいことが報告されました。今後の明治学院大学のキリスト教活動を探る嚆矢となりました。

記念の年にあたって学内外で催された行事、活動などは枚挙にいとまがない。この地殻変動が継続し、近い将来に大きな形あるものに結実することを切に望むものです。

ヘボン塾から起算して150周年のこの年に、研究所のお仕事も含めて、建学の精神キリスト教に係わる仕事に携われたのは、望外の幸せでした。支えてくださった皆様一人ひとりに、心より感謝を申し上げます。

栄光在天

しば・じゅんじ（国際学部教授・所長）



境界を超えるキリスト教

明治学院大学キリスト教研究所編

『境界を超えるキリスト教』

(明治学院大学キリスト教研究所編、教文館、2013。)

山田純大さんトーク&サイン会

播本秀史

キリスト教研究所主催、NHK出版後援のキリスト教研究所公開講演会が「山田純大さんトーク&サイン会」と銘打って2013年12月20日(金)18時より19時20分まで白金校舎本館10階大会議場で行われた。70名位が定員の会場に補助用の椅子も用意しての講演会だった。山田氏は『命のビザを繋いだ男—小辻節三とユダヤ難民—』（NHK出版、2013年）を上梓されている。そこで扱われた「小辻節三」が明治学院神学部卒ということから講演会となったわけである。小辻節三は日本においてはじめてユダヤ教のラビとなった人で、ユダヤ教学、ヘブライ語学者でもある。「六千人の命のビザ」ですでに杉原千畝は有名だが、杉原の発行したビザは日本での滞在が10日間しか許されていなかった。小辻の活躍がなければ、杉原のビザは虚しく無効となり、せつかく逃れてきたユダヤ人はナチに引き戻される運命であったことだろう。文字通り小辻は「命のビザを繋いだ男」であった。

この「トーク&サイン会」が開かれるに至った経緯を紹介する。NHK出版に勤める明学大卒業生で私の教職の授業をとっていた田口（旧姓堀川）由美子さんが山田氏の本を私に贈ってくれた。13年9月の夏休み中だった。それがそもそもの始まりだった。明学卒業生にこんなすばらしい人がいることに感動して贈ってくれたようだ。同封された文面から彼女の熱い母校愛を感じた。私も小辻

なにがなされるといいのか

中山弘正

2007年春で、経済学部専任教員の任期を終えたが、その後もこの春までの7年間ほど「キリスト教と経済」という2単位ものを非常勤として勤めさせていただいた。昔の「キリスト教専門」に当たる科目である。以前は上級生が必修で取っていたと思うが、1980～90年代に、各学部がそれぞれの学部の性格に合った2単位の選択科目にしていた(例、文学部は「キリスト教と芸術」)。学院長の任期(4年)を終えて経済学部にもどしていただいた1998年度だったろうか、経済学部は上記のような科目名にしたので、お前やってくれ、といわれて以来担当させていただいてきた科目である。

横浜キャンパスでのここ数年間のことについて言えば、2年生で、いつも約100名位であった。私は、「経済」の方は差し当たり、「講義」でも多少はわかろうが、「キリスト教」の方は、「こんな、教室で、マイクで話してわかるようなものではない。ぜひチャペルアワーに出るように」と何度も言ってきたし、はじめの頃は、チャペル入口で、出席した学生に「ひと言」書かせて「考慮」したりしていたが、そんなことをしてもチャペルに来る学生はひどく少なかった。

こうした体験からも、『境界を超えるキリスト教』では、司馬純詩「キャンパス・ミニストリーの前線にあって」がとりわけ興味深いものであった。とくに6.「活動の課題」には共感するところ大であった。

思い出してみると、5・1コード(専任教員の中で、1990年代半ば頃、クリスチャンは5人に1人だったが、少なくともその比率を落とさないようにしよう、という決議)また、「宣教」そのものを専門的な仕事とするべき「学院牧師」の制度化等々は、私が学院長の頃に、連合教授会で決めたことだったかと思う。今でも、5・1コードを守っている学部がある、とごく最近耳にしたことがあり、とても嬉しかった。教員人事となると大変だが、先の「学生諸君のチャペル出席」について言えば、「キリスト教の基礎」などでは、もっとも義務化した方がいいのでは〔詳しいご方針は存じ上げないが〕と常日頃思ってきた。

ところで、私は、「ヘボン聖書研究会」という、YMCA・YWCA系とは別の小さい福音派の群が旗揚げした年に、ちょうど経済学部の専任講師に採っていただいた—その前に5年居た法政大学の助手時代に私は受洗—ということもあり、「顧問」を依頼されたので、明学在職中の40年間それも務めていた(現在、深谷美枝先生)。私の大きな喜びの1つは、この「ヘボ研」の卒業生が約400人とえられたこと、そのうち約40名が牧師・牧師夫人になっておられることである。顧問といっても、DPM(日々の祈り会)に出るだけでなく、出来るかぎり合宿などにも一緒に行っていたので、やれ夏休み、冬休み、春休みなどと経済学部のゼミ合宿とヘボ研合宿といつも2度は合宿をやるので、正直しんどかったが、現在でもこの卒業生たちとの素晴らしい交流が沢山与えられているのは嬉しいことである。この「ヘボ研顧問」を

つとめて、私が学んだことのひとつは、「学生伝道は、学生自身が相当大きい力を発揮する」ということである。何といても、同世代の学生は、その世代にしかわからない色々な経験・体験・考え方があろう。「全ては主の業」であるが、この要因は本当に大きいと思う。

ここ数年でも、自分の出校日だけでも、ヘボ研の集りはのぞいていた。もう、2世代目の兄姉〔〇〇兄の娘さん?!〕にも何人か出会えた時は本当に感謝であった。すべては主の業、主のお力である。創立 150 周年、という驚くべき祝福のうちにこれからも日々の祈りをもって、世にあるかぎり、明学のキリスト教の盛んならんことを祈り続けさせていきたいと願っている。

(主 2014 年 2 月 4 日)

なかやま・ひろまさ (名誉所員)

雑録

植木 献

先日、1メートル以上の大雪に6日間閉じ込められるという希有な経験をした。辺鄙な山中に住んでいるから自業自得なのだが、行き場のない閉塞感と自衛隊の救援活動によって外に出られるようになった解放感とのギャップは想像以上だった。

自然災害ですらこうだから、ユダヤ難民たちの不安が小辻によって九死に一生を得た喜びとどれほどの落差だったのかに自ずと思いを馳せるようになった。

一方で、大雪の翌日から晴天が続いたため、青みを帯びた雪に閉ざされた非日常的な空間はあまりに美しかった。だから飼い犬と一緒に雪中に飛び込み、転げ回っていた間は、閉塞感よりもむしろ自由を感じていた。

大学も「象牙の塔」として閉塞感や世間ずれしていることばかりが強調されるが、今の日本社会とあえて一線を画する空間があることは重要だと思う。キリスト教教育がそこで大きな役割を果たすべきだが、それは単に違いを強調するためのものではなく、一線を画することによって生まれる自由があるからこそ価値あるはずだ。

景気回復が語られながらも青年層に先行きの見えない閉塞感が漂う今こそ、キリスト教大学は自由の場であるべきだ。そこからこの閉塞感を突き破る力が生まれることを信じていたい。

うえき・けん (教養教育センター准教授・主任)

研究所活動（1月から3月）

所員会議

第7回

開催日時：2014年1月22日（水）14：00-

開催場所：白金校舎本館キリスト教研究所

第8回

開催日時：2014年2月26日（水）13：30-

開催場所：白金校舎本館キリスト教研究所

戦後の宣教師研究プロジェクト

研究会

開催日時：2014年1月13日（木）13：00-

開催場所：白金校舎本館キリスト教研究所

キリスト教研究所主催

レクチャーコンサート

開催日時：2014年2月17日（月）

開場 18：30- 開演 19：00

開催場所：白金校舎大チャペル

司会進行：加藤拓未（協力研究員）

ソプラノ：鈴木美登里

テノール：クヌート・ショホ

ヴァイオリン：大西律子

オルガン：安積道也

3月研究会

開催日時：2014年3月6日（木）15：00-

開催場所：白金校舎本館92会議室

発表①

「2012年度特別研究報告；イタリアでのパドヴァのアントニオ研究—『境界を超えるキリスト教』掲載論文について—」

発表者：手塚奈々子（所員・経済学部教授）

コメント：永野茂洋（所員・橋梁教育センタ

一教授）

発表②

「台湾キリスト教史研究のむずかしさ」

発表者：高井ヘラー由紀（協力研究員）

コメント：岡部一興（協力研究員）

懇親会

開催日時：2014年3月6日（木）17：45-

開催場所：白金校舎本館キリスト教研究所

新着図書（1月から3月）

- ・『福音と世界』No. 1、新教出版社、2014。
- ・『福音と世界』No. 2、新教出版社、2014。
- ・『福音と世界』No. 3、新教出版社、2014。

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第63号

2014年3月6日 発行

明治学院大学キリスト教研究所

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

TEL: 03-5421-5210 / FAX: 03-5421-5214

Email: kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩